Virginia Woolf の フェミニストとしての成長過程

― *A Room of One's Own* を中心として―

今　村　梨　沙

Abstract

A Room of One's Own (1929) is one of the most famous feminist essays written by Virginia Woolf (1882-1941). In this essay, she emphasizes the importance of having both of her own money and room in order to be an emancipated woman. While she encourages women's social advance, we notice that her writings display some contradictions.

The purpose of this paper is to examine what drove Woolf into such conflicts, and how she dealt with and tried to solve them as a feminist. Woolf was raised in a patriarchal family with the nineteenth-century atmosphere. Though she became critical of the then-ideal image of 'the Angel in the House,' she failed to overcome the Victorian tradition which had haunted her for a long time. She was afraid of the blame for her feminist challenge by the people who had the patriarchal point of view. Moreover, she thought it was ideal for a woman writer to have both of male and female factors, in short, to be androgynous; she insisted on the significance of androgyny and admired the androgynous without searching for the meaning of 'femaleness.'

On the whole, we can regard Virginia Woolf as a feminist who had contradictions and could not break through the barrier of social class at least until 1928, when she wrote *A Room of One's Own.*

序

A Room of One's Own (1929) は、Virginia Woolf (1882–1941) が、フェミニスト的視点に立って書いたエッセイである。このエッセイは1928年10月に、イギリスの女子大学 Newnham College と Girton College で行われた彼女の講演会の原稿に基づいて書かれたものであり、講演では割愛された部分が掲載されている。このエッセイの中の発言、"a woman must have money and a room of her own if she is to write fiction" (*ROOM* 4)[1] はあまりに有名であり、現在のフェミニズム研究においても言及されることが多い。

エッセイの架空の人物である主人公「私」は、大学へ行った際に感じた女性差別に対する不満を強く訴え、男性学者の女性を侮辱した発言を取り上げて、女性に小説を書くよう喚起している。Woolf は、読者に強く印象付けるかのように、エッセイの最後の引用部分に、批評家 John Langdon Davies の発言 "when children cease to be altogether desirable, women cease to be altogether necessary" (*ROOM* 104) を紹介し、女性の役割を出産の道具に限定しようとする、侮蔑的な男性優位の発言を覚えておくよう促す。このように、Woolf は、彼女のフェミニズムをエッセイの中で展開しているが、一方で彼女のフェミニストとしての考え方には、矛盾や一貫性の欠如があることも明白である。彼女がフェミニズムに目覚めてから、*A Room of One's Own* を執筆した1929年までの書簡やエッセイを読むと、彼女のフェミニストとしての躊躇や迷いを知ることができる。

本稿では、Woolf が作家人生の中盤で出版した *A Room of One's Own* に焦点を当て、Woolf のフェミニストとしての成長過程をたどっていきたい。Ⅰ章では、Woolf がいつ頃フェミニズムに目覚め、どのようなフェミニストとして周囲から捉えられていたかを検証する。Ⅱ章では、*A Room of One's Own* の中で生じた彼女の自己矛盾と葛藤を考察し、Ⅲ章では、どの

ような状況下で彼女の中で矛盾や葛藤が生じたかを論じていきたい。

I　フェミニストとしての Virginia Woolf

フェミニストとしての Woolf について論じる時、多くの批評家は、そもそも Woolf がフェミニストであったのかどうかという問題を提示する。この問題に対して Rosenman は、ある批評家が、もし「フェミニスト」という言葉の定義が、女性を一人の人間として扱うことを意味しているのであれば、Woolf は間違いなくフェミニストである、と明言したことにふれ、この概念はフェミニズムの不可欠な要素である（17）と記している[2]。なるほど、女性をジェンダーの枠組みの中で捉えるのではなく、男性と同じ人間であると解釈することは、フェミニズムの根本的な理念である。しかし、Rosenman が、Woolf をフェミニストに位置づけることに多少の躊躇いをにおわすこの発言には、フェミニストとしての Woolf が抱える問題や、読者が抱くであろう疑問点が、予め想定されていることが窺える。そこで、Woolf がどのようなフェミニストであったのかを詳細に検証することが、第一に必要であるので、それに関して調べていきたい。

Woolf の文書の中に、フェミニストを自認する次のような発言がある。彼女は、1916年１月23日に友人 Margaret Llewelyn Davies（1861-1943）へ宛てた手紙の中で、“I become steadily more feminist”（VW *Letters* 2：740）と記している。この記述は、*A Room of One's Own* の基となった1928年に行った講演会より12年も早い時期のものである。これは、Woolf がフェミニストの道を歩み始めていることを自認している文章である。しかも、Davies は、Women's Co-operative Guild[3] という組合の幹事を務めるフェミニストであった。そのような積極的な活動家 Davies に書き送った、Woolf のフェミニズムに対する覚醒の宣言は、一時的なものではなく、これからフェミニストの道を歩む覚悟が Woolf 自身にあることを伝える文書だと理解することができよう。

次に、彼女の同性愛者の恋人であった Vita Sackville-West (1892–1962) の息子 Nigel Nicolson (1917–2004) の発言を取り上げてみよう。Sackville-West は、息子を連れて Woolf としばしば面会したので、Nicolson の著書には Woolf に関する言及が頻繁に見られる。彼は、1982年の Woolf 生誕100年祭での講演会において、“Virginia Woolf held strong political views, but did not possess a political mind.” (Nicolson 20–21) と述べている。彼によると、Woolf は彼女自身の政治的理念は持っていたものの、その理念を外部へ提示しない、つまり政治に対しては行動的ではない人物であった。彼の言う Woolf の “a political mind” の欠如は、1928年のイギリス議会（*A Room of One's Own* の出版の前年）において、婦人の選挙年齢が男性と同じ21歳に引き下げられたという画期的な政治的改変があったにも関わらず、Woolf がエッセイの中でそれに言及しなかったことからも確認できよう。

また、Yukishige と Kelsen の共同論文においても、“. . . one [Woolf] who was rather a woman of a common sense than politically a feminist” (Yukishige and Kelsen 24) という主張が見られ、Woolf が政治的活動を行うフェミニストではなかったことが指摘されている。実際、Woolf は、政治が自分にとってあまりに急進的なので、その速度に付いていくことができず、政治的な活動は不可能であると考えていた。彼女は、友人への手紙の中で “But then of course I'm not a politician, and so take one leap to the desirable lands.” (VW *Letters* 6：3699) と書いている。Black はこの文書に関して、“She thought her role was to supply the vision” (191) と説明している。つまり、Woolf にとって、自分の役割は、政治的活動を行うことではなく、フェミニストへの道へ誘導するためのヴィジョンを作家として、女性たちへと発信していくことである、というものである。続けて Black は、*A Room of One's Own* では、Woolf が女性の “economic independence and privacy” や “the opportunity

for advanced education” に関して論述していることや、Woolf が書いた Margaret Llewelyn Davies の著書 *Life as We Have Known It* (1931) の序文において、女性の “minimum wages” や “reformed divorce laws” にふれていることを指摘し (Black 191)、そこに Woolf のフェミニストとしての積極的な政治的発言を見出している。

確かに、Black の指摘するように、Woolf は *Life as We Have Known It* の序文において、労働者階級の女性の現状についてふれてはいる。しかし Woolf は、それらを列挙するに留まり、改善を要求する文章は書いていない。このように、Woolf は自分が政治的な活動に参加できないと判断したので、「作家」という自分の立場を活用して、フェミニスト的提言を自身の小説やエッセイの中に織り込むことで、フェミニストの地歩を固めようとした。従って、女性たちの社会進出を鼓舞するためのヴィジョンや思想を提供することができた点において、Woolf はフェミニストとしての役割を果たそうとしていたと認識できる。

では、政治的活動に距離を置いた Woolf は、作家という立場を使って、*A Room of One's Own* の中で、どのようなフェミニスト思想を展開したのだろうか。次章で考察してみたい。

Ⅱ　Woolf の両性具有への賛美

A Room of One's Own で展開される Woolf の女性に対する考え方には、しばしば矛盾が見受けられるため、批評家に非難されることが多い。本章では、重大な二点の矛盾を取り上げる。

まず、一つ目の矛盾は、Woolf 自身の感情表現に対する葛藤の中に見られる。Rosenman は、次の Woolf の発言を問題にしている。

> It is fatal for a woman to lay the least stress on any grievance; to plead even with justice any cause; in any way to

> speak consciously as a woman. And fatal is no figure of speech; for anything written with that conscious bias is doomed to death.（*ROOM* 97）

Woolf はここで、女性は、女性としての不平不満を少しでも強調してはならないし、いかなる方法でも、自分が女性であるということを意識して作品を書くことは致命的である、と言う。そして、「致命的」というのは言葉の綾ではなく、こうして書かれた作品は後世に残らないと Woolf は力説する。Rosenman は、この Woolf の文章を取り上げて、女性作家が女性としての意識を持って本を書くことは、むしろ、女性の苦悩の開示と解釈することができ、Woolf が感情表出を嫌悪することに矛盾を指摘する（104）。というのも、*A Room of One's Own* というエッセイ自体が「怒り」に満ちているので、女性が憤慨や不満を表現してはならないという著者 Woolf の主張には、自己矛盾がつきまとう。Woolf のエッセイの中で読み取れる「怒り」とは、例えば、性別や学歴によって、出入りを禁じる大学の敷地（*ROOM* 5）や、女性の劣等性を指摘した von X 教授に対する主人公「私」の怒りなどが挙げられる（*ROOM* 30）。

さらに Rosenman は、Charlotte Brontë（1816–55）の小説 *Jane Eyre*（1847）に対する Woolf の批判に言及する。Brontë が描写した主人公 Jane の願望や欲求不満は、作家自身の感情の表れであり、女性であることを意識して書かれているため、小説の崇高さが損なわれている、と Woolf は述べる。しかし、Rosenman は、Jane の「怒り」や不満は "legitimate, essential source of female self-expression"（109）である、と解釈し、Woolf の考え方に異を唱える。なぜなら、Woolf 自身がエッセイの中で彼女の「怒り」を表現しているにも関わらず、Brontë の「怒り」を Woolf が批判することには、多くの読者も矛盾を感じるであろうからだ。Rosenman は、Woolf のこの二律背反について、Woolf が自己に内在する怒りや不満

を表出することを、家父長制度に囚われ続ける人々から批判されはしないかと恐れているからだと解釈する。確かに、Woolf は *A Room of One's Own* の中で、女性の「怒り」を正当化する明言を避け、架空の人物である主人公「私」を使って、Woolf 自身の「怒り」を暗に示すことで、読者に性差別への不満を訴えかけている。

「怒り」を包含した自己の感情表現をしたいという願望と、自己を曝け出すことに対する抵抗感・躊躇い、この葛藤のために、Woolf は自己矛盾を起こしている。*A Room of One's Own* の目的は、女性に対し、執筆を通して社会進出をせよ、と促すことであった。しかし、Rosenman は、"Rather than inspire women, the essay perpetuates inhibitions against female self-expression, particularly against female anger."（20）と指摘する。要するに、Woolf は女性に自己表現を抑制することを促すエッセイを書き上げてしまった、というのである。

二つ目の矛盾は、Woolf の両性具有への言及である。Woolf は、両性具有の精神によって本を書くことを提唱している。彼女は、人間の肉体に二つの性別があるように、精神にも二つの性別があると説く。男性の脳内では、男性的な精神が働き、女性の脳内では、女性的な精神が作用している。そこで、"The normal and comfortable state of being is that when the two live in harmony together, spiritually co-operating."（*ROOM* 92）と述べ、二つの精神が結合した時に健全な精神が生まれ、この状態が作品を創作する時に最も適していると力説する。Woolf は、Samuel Taylor Coleridge（1772–1834）が座談集 *Specimens of the Table-Talk*（1835）の中で述べた "a great mind is androgynous" という表現に言及し（*ROOM* 92）、"He［Coleridge］meant, perhaps, that the androgynous mind is resonant and porous; that it transmits emotion without impediment; that it is naturally creative, incandescent and undivided."（*ROOM* 92）と説明している。彼女は、William Shakespeare

(1564-1616) を始め、John Keats (1795-1821)、Lawrence Stern (1713-68)、William Cowper (1731-1800)、Charles Lamb (1775-1834)、Coleridge などは、両性具有者的な作家であると明言する。従って、男性ならば、彼らのように男性にして女性的な (woman-manly)、女性であれば、女性にして男性的な (man-womanly) 精神で本を書けば、偉大な作品が産まれると言う。Minow-Pinkney は、Woolf の定義する両性具有の状態は、"not a single unitary state but rather a 'wholeness' composed of heterogeneity" (9) だと解説する。つまり、一つの「性」の状態に制限するのではなく、男性要素と女性要素を識別することなく両性を混合し、両性の元来持つ特質を保ちながら、それぞれの異種の性質が一つの集合体になった状態を両性具有の精神状態だと述べる。

しかしながら、この Woolf の両性具有論に関して、Showalter は次のような批判的な見解を述べている。"Androgyny was the myth that helped her evade confrontation with her own painful femaleness and enabled her to choke and repress her anger and ambition." (264) Showalter も Rosenman と同様に、Woolf が自分の怒りや野心を抑圧していることを指摘しているのだが、Showalter の場合、Woolf の感情表現の抑制を可能にしたものは、両性具有だという見解を示している点が興味深い。Showalter は、Woolf の両性具有賛美が、自己の苦しみに満ちた女性の特有性 "femaleness" と直面することを避けるための手段であったと主張する。Woolf にとって、"femaleness" とは、「母性」を意味し、Woolf の望みは、"To be loved she must be like her mother" (270) であると Showalter は解釈している。

Showalter は、Woolf がその "femaleness" の規範の熟考と追求を回避し、むしろ、自己表現を抑制するきっかけとなったものの一つとして、彼女が幼少時代から抱える精神的不安定による発狂を防ぐための「安静療法 ("rest cure")」(274) を挙げている。「安静療法」とは、アメリカの医師 Silas

Weir Mitchell（1829-1914）が展開した、「幼児のように医師に従属した状態にする」という思い切った治療法であり、主に神経症の女性患者に用いられた。通常、「安静療法」においては、患者は社会から隔離され、安静のためにあらゆる知的活動を禁止され、食事を大量に摂らされた。

Woolf の場合、過食させることの目的は、彼女に擬似妊娠を体験させることにあった。Woolf の甥 Quentin Bell（1910-1966）によると、Woolf は自分の子どもを持つことを希望していたが、夫 Leonard（1880-1969）は彼女の精神状態および衰弱した身体を考慮し、様々な医師に彼女の妊娠について相談した結果、子どもは持たない方が良いという結論に到達した。彼は Woolf を説得し、それに同意させた（8）。しかし、Woolf は子どもを持つという希望を失った結果、「母性」すなわち“femaleness”を保持できない悲しみに打ちひしがれ、精神的不安定に陥ることとなる。Leonard は、この状態が Woolf を狂気にさせると考えた。そこで彼は、強制的に妻を入院させて「安静療法」を受けさせた。そのことが彼女の精神状態を更に悪化させた。Showalter は「安静療法」に関して、“Besides forcing a woman to stifle the drives and emotions that had made her sick with frustration in the first place and depriving her of intellectual outlets for their expression, the rest cure was a sinister parody of idealized Victorian femininity: inertia, privatization, narcissism, dependency.”（274）と批判的な見解を示している。「安静療法」を強いられた Woolf は、全ての物事に対する欲求不満を無理に抑制させられ、彼女の女性としての社会進出の第一歩である創作活動をも取り上げられることとなる。

彼女が「安静療法」を受けるために入院したのは、1910年と1913年のことである。Bell の記した Woolf に関する伝記の中で、強制的に夫に入院させられたことに対する Woolf の態度が次のように描写されている。“Childlike, she burst out against the husband who had put her away in this

awful place. But then, seeing his worn and distressed face, she was overcome with guilt and misery.”（13）Woolf は、無理矢理自分を入院させた夫 Leonard に対して怒りをぶつける一方で、自分の狂気のために夫を悩ませているという罪悪感に苛まれ、彼を哀れに思うのである。この強制的な入院の繰り返しが、Woolf の自己表現の抑制の原因となっていると考えられる。Woolf は、創作活動において自己表現を試みようとしたが、「安静療法」によって、その道は絶えず阻まれた。彼女にとっては、夫である Leonard でさえも、社会で活動しようとする女性を阻止する存在に思えた。彼は妻からあらゆる物事に対する活力を奪い、まるでヴィクトリア朝時代の理想の女性像、つまり不平不満を言わず男性に従う女性に仕立て上げようとしているのだ、と Woolf は捉えた。彼女は夫の独断に憤慨するものの、その一方で、疲労困憊している彼を見る度に、自分のために Leonard が犠牲になっている、彼の人生を台無しにしている、と感じる。怒りを表出しようとするが、夫の立場になって考えると、Woolf の憤慨は萎縮していった。

1915年に Woolf の Leonard に対する怒りは頂点に達した。彼女は Leonard に会おうとせず、すべての男性に対して反感を抱いた。当時の Woolf の心理状態を Showalter は次のように解説する。

> The dynamics of this particular attack suggest that Virginia recognized the tyranny of Leonard’s decision at the same time that she was guiltily coerced into accepting it. Madness was the role in which she articulated her resentment and rage, and feeling rage against someone who loved her and wanted to care for her redoubled her sense of guilt.（276）

Leonard を発端とした男性に対する Woolf の激怒は、夫の独断で彼女の入院が決められたことと、彼の指示を強いられたことが原因であった。フェミニスト的思考に溢れた Woolf にとって、夫の独断は男性による “tyranny”

を連想させた。そして、狂気は単に彼女の怒りを表現していただけでなく、自分の世話を献身的に施す夫に対して増幅する罪悪感の現れでもあった。狂気になる度に憤慨し、その度に夫に申し訳ない、という矛盾した心情を繰り返すことが一因となって、Woolf は最終的に自殺を選択する。こうして、自己表現をしたいという意志とは対立する、夫の献身的な姿勢に対する罪悪感から生じる男性批判への後ろめたさが、彼女の心に葛藤を引き起こし、両性具有を賞賛する考え方を引き出すことになる。こうして、*A Room of One's Own* は矛盾に満ちたエッセイとなっていく。

Showalter は、"Whatever else one may say of androgyny, it represents an escape from the confrontation with femaleness or maleness."（289）と述べて、Woolf の両性具有精神の促進が、女性特有の "femaleness" と直面することからの逃避である、という判断を下している。Woolf は、母親になれないということは、自分が "femaleness" の欠如した "unsexed"（Showalter 270）な女性になると考えたため、"femaleness" の意味の追及と異議の申し立てを回避しようとした。彼女は、子どもを持たなかったものの、女性は子どもを持つべきだという伝統的な価値観を放棄することが最終的にできなかった。

そこで Woolf は、精神活動のすべてを「女性性」に収斂してしまうのではなく、女性も男性的な性質を持つこと、すなわち両性具有の精神を持ち合わせることの重要性を主張することへと逃避した。たとえ、Minow-Pinkney が定義したように、両性具有の状態が、男性要素と女性要素の全性質を混合してしまうのではなく、それらの要素の特性を損なうことなく一点に集合させた状態であるとしても、Woolf は女性が立ち向かうべき "femaleness" を回避し、バランスの良さという解釈の中で、男性性を安易に取り入れることで、女性の創作に関する問題を解決させてしまった。これは、結果的に、女性は男性あるいは男性性なくして創作することはできない、という論理に終結してしまっている。

Woolf は、フェミニストの精神を貫きたいという意志を持ちながら、ヴィクトリア朝の因襲に囚われ、女性の社会進出を促すことに対して恐れを感じた。また、世の男性の一員である夫 Leonard の独裁的な態度に立腹しながらも、彼の献身的な看病に罪の意識を感じることで、自己の感情表現に躊躇いを感じた。彼女は、このような葛藤の解決策として、両性具有賛美を *A Room of One's Own* の中に持ち込んだと解釈できる[4]。

Ⅲ　階級という障壁

前章で眺めたように、Woolf が正面からフェミニズムを論じることを阻み、彼女の心に葛藤を生じさせ、*A Room of One's Own* の発言の中に矛盾を生じさせた原因は、彼女の感情表現をすることに対する周囲からの批判と夫に抱く後ろめたさであった。この背景から、我々は、Woolf が抱えた矛盾の中にはもう一つの原因、彼女の属する階級があることに気付くべきである。

Woolf は、家父長制度という因襲、つまりヴィクトリア朝時代の慣習が色濃く残っている上層中産階級の家に生まれた。父親は文壇の大御所 Leslie Stephen（1832-1904）である。母親 Julia（1846-1895）は、夫に「家庭の天使（the Angel in the House)」として生涯仕えたと言われている。「家庭の天使」とは、中産階級の間に浸透した言葉であり、Coventry Patmore（1823-96）の同名の詩「家庭の天使（*The Angel in the House*, 1854-63)」に因んだ、良妻賢母の名称である（川本 pp.54-55)。Leslie も、妻というものは「家庭の天使」であるべきだという考えを持っていた。彼は徒歩旅行が好きで、何度も旅行に出かけたが、妻の外出を許可したのは、結婚前から彼女の希望で続けていた看護の仕事のために外出する時だけであった（Gordon 23)。そして彼女に休暇を与えなかった。Leslie は気性が荒かったため、時折、Julia に辛く当たることがあったが、それでも彼女は彼を責めずに黙って彼を見守り、身の回りの世話をし続けた。そして Julia は49歳の若さで亡くなった。Woolf は、母が常に父に献身的であったため、早く

亡くなったと考えた。

そのような家庭環境の中で、Woolf は、父親の死後、脱「家庭の天使」を試み、保守的な中産階級の慣習から脱皮しようとした。つまり、母親の早すぎる死の原因は、父親が母親を束縛し、横暴であったことにあったと Woolf は考えたのである。彼女は、父母の関係を反面教師として成長し、女性を男性から解放したいという意志を持つようになった。そして、知的集団 Bloomsbury のメンバーの一員となって、男性と対等に様々な問題について議論し、社会主義の運動に参加し、フェミニストの道を本格的に歩み始めた。

しかしながら、彼女は本質的に中産階級の価値観から離脱できたわけではなかった。第一に、Bloomsbury の殆どのメンバーが男性であり、しかも彼らは作家や批評家、あるいは Cambridge の学生などエリートであった。初期の女性のメンバーは、Stephen 家の姉妹のみで、Bloomsbury のサロンに参加する女性たちも、裕福な家庭の子女であった。そのため彼らは、自分たちより金銭的に困難な立場に置かれた人物とは関わることがほとんどなかった。

Woolf と労働者階級の女性たちが出会う機会を作ったのは、本稿の第 I 章でもふれた友人 Margaret Llewelyn Davies であった。彼女は、1916年の秋頃から、Women's Co-operative Guild の地方支部として、Woolf 夫妻の自宅兼出版社であった Hogarth House を月に一度借りて会合を行い、Woolf との親交も深めた[5]。フェミニズムに関心のあった Woolf は、その会合の演説者として Davies に招待され、度々出席した。そこで Woolf は、階級差を深く痛感させられることとなる。Woolf は、1913年 6 月の組合の会合での様子と、自分の心情を思い起こし、次のように述べている。

> They [working-class women] want bath and money. When people get together communally they always talk about baths

> and money: they always show the least desirable [*sic*] of their characteristics — their lust for conquest and their desirable for possessions. . . . We [middle-class women] have baths and we have money. Society has supplied us with all we need in that direction. Therefore however much we sympathized our sympathy was largely fictitious. It was aesthetic sympathy, the sympathy of the eye and of the imagination, not of the heart and of the nerves; and such sympathy is always physically uncomfortable. (*CDB* 236)[6]

Woolf は、労働者階級の女性たちが、「彼女たちの性格の中の最も好ましくない部分」、すなわち自分たちが手にしていないものに対する「所有願望」を示していると述べている。こうして彼女は、心の底から労働者階級の女性たちの発言に賛同することが出来ず、Woolf の心には同情しか生まれなかった。こんな同情は偽物だ、なぜなら ". . . it is not based upon sharing the same important emotions unconsciously" (*CDB* 239) であるからだと Woolf は考える。つまり、本当の同情というのは、無意識の共感であるが、Woolf が持った同情は意識的なものであった。彼女は、労働者階級の女性たちの心情や目標を共有することが不可能である、と冷静に思う。そして、会合の参加者たちと Woolf の生活環境および階級の相違は、双方の協調性を喪失させ、Woolf のフェミニストとしての意識や士気の向上を妨げた。この会合を通して、彼女はフェミニズムを唱えようと試みるものの、"But the barrier is impassable" (*CDB* 239) と階級の垣根を越える困難さを痛感することとなる。

組合の参加者と自分の間に境界線を感じた Woolf は、距離をおいて組合の様子を見るようになる。彼女は、1916年 1 月23日の Davies 宛の手紙において、組合に言及して次のように述べている。". . . I daresay the Women's Guild has done something; isn't it touching how I return to that achievement of yours always for comfort?" (VW *Letters* 2 :

740）女性労働組合の成し遂げたことを Woolf は思い起こすのだが、それは彼女自身が慰めを得るためである。Woolf は、組合活動に共感するフェミニストとしてではなく、第三者の目で彼女たちの活躍を見つめる自分自身に気付いている。実際、1919年11月16日の Davies 宛の手紙の中で、Woolf は、“You'll never like my books, but then shall I ever understand your Guild? Probably not.”（VW *Letters* 2：399）と女性労働組合に関して、Woolf が真に理解できていない事実を記している。

Woolf が Davies の主宰する Women's Co-operative Guild の会合のために、自宅を使用することを許可したことや、その会合に幾度も参加したことは、Woolf が労働者階級の女性の活動を促進するためというより、彼女の友人である Davies に協力するためであったと推測できる。Woolf は、Davies の人柄や業績を友人宛の手紙で次のように賞賛している。

> Considering Miss Davies too, who, very cool and distinguished looking . . . what a woman Miss D. is: how she has devoted her life: how she has changed the women's lot: how she is known, respected, loved, and now she will speak, and they must remember Miss D. is a lady.（VW *Letters* 2：1259）

Woolf は、Davies の気品ある外見に加えて、彼女が世の女性たちに、如何に貢献したかについて述べ、彼女の存在の重要性を語っている。また、Davies はしばしば Woolf を訪れることがあったが、他の訪問者が来た時と比較して、Woolf が彼女に会った後は疲れが見られず、冷静沈着に小説の執筆に取りかかることができた（VW *Letters* 2：1109）。

このように Davies は、Woolf にとって、心身に負担をかけることなく付き合いのできる相性の良い友人であった。そのため、Woolf は、Davies や彼女の活発なフェミニストとしての活動を本心から尊び、彼女の活動を支援することは出来たが、組合に参加する労働者階級の女性たちに対しては、偽

りの同情しか持てず、彼女たちの気持ちを共有することは出来なかった。階級社会という障壁が原因ではあったが、Woolf のフェミニストとしての限界が、こういう側面にも見て取れる。

さらに、Woolf は女性の社会進出に対して、非常に消極的な発言をしている。組合の会合の感想の中で、働く女性になるということは "the contamination of wealth and comfort"（*CDB* 237）に自らを晒すことになってしまう、と彼女は述べる。この Woolf の発言に関して、Nicolson は、"In fact, she [Woolf] believed that, if working women moved socially upwards, they might lose some of their robustness"（21）と解釈する。親から譲り受けた私産を所有する Woolf にとって、労働者階級に属する女性は、男性社会の中で揉まれながら、自分自身で富を手に入れ、欲しいものを購入し、優れた知性を身に付けるが、同時に女性本来の家庭を守る力強さを失っていく。一方、家に閉じこもって「家庭の天使」を務める女性は、私産もなく、本能的に子育てをして家事をこなし、家庭を守る。しかしながら、「家庭の天使」であり続ける女性は、生まれ持った女性特有の母性や家庭を守る力強さを保持し続ける、と Nicolson は Woolf の発言を解釈する。彼の解説に従えば、Woolf は、女性の自立を求めながら、階級差から垣間見える粗雑さに抵抗感を覚え、結局は中産階級の女性に対する価値観、すなわち母性称賛や女らしさの規範に少なからず執着しているように思われる。

Woolf は、過去の女性たちから継承した女性にしかない剛健さを現代に生きる女性たちが保持し続けることを願った。さらに Woolf は、フェミニストの掲げる目標である、女性参政権や均等な男女の雇用などの女性の社会進出に関しても、本来女性に備わった家庭を守るための女性の力強さや逞しさが、激しい競争社会で揉まれて喪失することを危惧し、消極的な姿勢をも示した。従って、*A Room of One's Own* を刊行した1929年の時点では、Woolf は、階級の壁を乗り越え、自立をあくまでも促す強い姿勢を持ったフェ

ミニストではなかったと言える。こうした Woolf の発言は、生まれ育った家庭環境にあると言える。彼女は、脱「家庭の天使」、および脱「中産階級」を成し遂げようとしたが、幼少期から根付いた、「家庭の天使」という価値観を彼女自身から排除し切れなかった。こうして、葛藤の末、Woolf は、自分自身のフェミニズムの概念に亀裂を生じさせてしまったと言えよう。

結び

Woolf は、作家であると同時に、フェミニストとしても評価され研究されてきた。しかしながら、彼女がフェミニストを志すに当たって、立ちはだかる障害物は多かった。そのため、彼女はしばしば自己との葛藤に苛まれた。特に、彼女がフェミニストの道を歩み始めた1916年頃から *A Room of One's Own* の原稿を執筆した1928年頃までは、Woolf にとって、女性として、またフェミニストとして、日々葛藤の時期であった。

彼女は、*A Room of One's Own* の中で女性に、男性と同じように小説や詩を書くように勧めた。だが、ものを書くこと以外での女性の社会進出に関する勧めは、どの箇所にも見当たらない。むしろ、彼女はこのエッセイおよびエッセイ発表前後に執筆した文書の中において、女性の社会進出が如何に困難であるかを訴え、彼女たちの社会進出を促す発言を敢えて控えているように思える。その上、Woolf は、女性たちにヴィクトリア朝時代に理想とされた「家庭の天使」の持つ女らしさや、女性の資質である剛健さを維持することを提案した。Woolf にこれらの矛盾を生じさせた原因は、彼女が生まれ育った家庭に残っていた家父長制にあった。そのため、Woolf に内在する躊躇いや迷いは、彼女のフェミニスト的な発言の中に矛盾を露呈させている。

さらに Woolf は、自分が属する中産階級という垣根を越えて、脱「家庭の天使」を試みたいという自身の理想とは反対に、矛盾した道標を女性たち、および自分自身に対しても立ててしまった。なぜなら、女性が本を書くとき

に重要なことは、女性が両性具有の精神を持つこと、つまり、彼女は女性の精神活動の中に男性的要素をも取り入れることを必要とする宣言をしたからである。これは、一見、女性性と男性性の均衡をはかるためのバランスの良い考え方と解釈できるが、他方で、バランスに収斂させてしまうことで、却って女性の自己表現である怒りや不満を押さえ込む結果となる。*A Room of One's Own* 以降の Woolf が、どのようなフェミニズムに到達し、階級の壁を乗り越えることができたのかを探ることが今後の課題であるが、それについては次の機会に譲りたい。

注

1 Virginia Woolf, *A Room of One's Own* (1929) (London: The Hogarth Press, 1984), p.4. Woolf は、女性が自由に使える金銭として、年収500ポンドという具体的な数字を提示し、部屋に関しては、誰にも侵入されないよう鍵を掛けられる自分だけの空間であることが重要だ、と強調した。しかし、当時の500ポンドは、一般家庭にとってあまりに高額であった上、女性が自分だけの部屋を持つことも一般的には困難であったため、Woolf は大変思い切った発言をしたとして注目を浴びた。以下、本稿中の *A Room of One's Own* からの引用は全てこの版に拠る。

2 Rosenman は、*Springfield Republican*, 26 (December 1929) において、"one reviewer" が発言したと指摘している。

3 1883年に発足された女性労働組合。1889年から1921年まで、Davies が幹事を務め、組合は栄えた。

4 Showalter は、Woolf が *A Room of One's Own* の内容を講演で発表した1928年には、Woolf 自身が女性の経験を描きたいと思うと同時に、作品内で自己表現をすることを押し留めようとして葛藤しており、その解決策として、両性具有を持ち出し、同年、両性具有を扱った作品 *Orlando* (1928) を出版した (291) と解釈している。

5 Virginia Woolf, *The Question of Things Happening: The Letters of Virginia Woolf Volume Ⅱ 1912-1922* ed. Nigel Nicolson (London: The Hogarth Press, 1976), p118. Nicolson の解説を参照。

6 Virginia Woolf, "Memories of a Working Women's Guild" *The Captain's Death Bed and Other Essays* (1950) (San Diego, New York

and London: Harcourt Brace Jovanovich, 1978), p. 236. 以下、本稿中の *The Captain's Death Bed* からの引用は全てこの版に拠る。

引用・主要参考文献

Allan, Tuzyline Jita. *Womanist and Feminist Aesthetics: A Comparative Review*. Athens and Ohio: Ohio University Press, 1995.

Barrett, Eileen and Cramer, Patricia. *Virginia Woolf: Lesbian Readings*. New York and London: New York University Press, 1997.

Bell, Quentin. *Virginia Woolf: A Biography Volume 2* (1972). London: The Hogarth Press, 1973.

Black, Naomi. Marcus, Jane ed. *"Virginia Woolf and the Women's Movement." A Feminist Slant*. Lincoln and London: The University of Nebraska Press, 1983.

Davies, Margaret Llewelyn. *Life as We Have Known It* (1931). London: Virago, 1977.

Gordon, Lyndal. *Virginia Woolf: A Writer's Life*. London and New York: W. W. Norton & Company, 2001.

Marcus, Jane. *New Feminist Essays on Virginia Woolf*. Hong Kong: The Macmillan Press, 1981.

Maze, John R. *Virginia Woolf: Feminism, Creativity and the Unconscious*. London: Geenwood Press, 1997.

Minow-Pinkney, Makiko. *Virginia Woolf & The Problem of The Subject*. New Brunswick and New Jersey: Rutgers University Press, 1987.

Nicolson, Nigel. ed. *Leave The Letters Till We're Dead: The Letters of Virginia Woolf Volume Ⅵ 1936-1941*. London: The Hogarth Press, 1980.

———. ed. Marcus, Jane. "Bloomsbury: the Myth and the Reality." *Virginia Woolf and Bloomsbury*. London: The Macmillan Press, 1987.

———. ed. *The Question of Things Happening: The Letters of Virginia Woolf Volume Ⅱ 1912-1922*. London: The Hogarth Press, 1976.

Rosenman, Ellen Bayuk. *A Room of One's Own: Women Writers and the Politics of Creativity*. New York: Twayne Publishers, 1995.

Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*. Princeton and New Jersey: Princeton University Press, 1977.

Woolf, Virginia. *A Room of One's Own* (1929). London: The Hogarth Press,

1984.

———. *The Captain's Death Bed and Other Essays* (1950). London: Harcourt Brace Jovanovich, 1978.

Yukishige, Mitsuko & Kelsen, Blair M. "Women and Fiction in *A Room of One's Own* — A Study on Virginia Woolf as a Critic — " 『英学　第31号』平安女学院短期大学　英学会、大阪、1999年 .

川本静子　松村昌家、川本静子他編「３章　清く正しく優しく—手引書の中の〈家庭の天使〉像」『英国文化の世紀３—女王陛下の時代』東京、研究社、1996年 .